

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330117

研究課題名(和文)近世村落社会における市場経済化と土地利用：経済史研究からみた人と環境の関わり合い

研究課題名(英文)The destatization and land use in early modern rural society: The involvement of men and environment from the view point of economic history

研究代表者

山内 太(YAMAUCHI, Futoshi)

京都産業大学・経済学部・教授

研究者番号：70271856

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円、(間接経費) 4,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、市場経済化の展開の中で、近世後期村落社会における土地所有・利用の地域的独自性を明らかにするとともに、その同質性をも検討することを課題としていた。本研究期間内において、特に真宗上田藩神塩尻村と越後国西蒲原郡中郷屋村の土地利用について詳細に検討することができた。そこからは、自然環境や支配・統治構造、生業活動、市場経済化の進展度の違いにより、異なる、その地域独特の土地利用が行われていたこと。またそれにもかかわらず、近世社会特有の土地所有・利用に関する処理がなされ、その点において類似性を有していたことも明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study had problems which reveal the regional uniqueness and consider the homogeneity of land use in villages in the late Edo period. In this time period, especially we could investigate into the land use of the shiojiri village in Shinshu Ueda Han domain and of the nakagoya village in Echigo province.

As a result, we found the different land use, depending on the natural environment, governance structure, economic activities, and the rate of development in market economy. Additionally, Land ownership and land use had been handling of early modern society. We have made it appear that the land ownership and land use in different area had a similarity in that regard.

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済学、経済史

キーワード：土地所有 土地利用 市場経済化 自然環境 村落社会 近世社会

## 1. 研究開始当初の背景

(1)本研究組織はこれまで、近世的土地所有の実態に関する実証研究を進めてきた。そこでは、家と村の両極に偏って論じられた従来の研究とは異なり、家々が取り結んでいた村落内外の諸関係(家連合)に特に着目し、各家々の土地所有・移動、土地売買や相続・譲渡等に対して、家連合が大きな影響力を保持していたことを明らかにした。同時に代表的な村からの視点、「村落共同体的所有」の一典型と見なされがちな割地制度についても、それが、強固な村落共同体をベースとする共同体所有の発現形態であるとは到底考えられないことを明らかとした。同時にこの割地制が、地域の自然環境や社会環境と密接に関連し、その必要性から存在していたことも明らかとなった。このような研究成果を踏まえ、さらに近世村落社会における人々の生活実態の解明を推し進めるために、近世的土地所有を基礎としつつ、そこで如何なる土地利用が行われていたのかを、次に明らかにする必要があると我々は判断した。そして土地利用の実態を明らかにするためには、自然環境という条件に加え、従来から着目してきた家連合、さらには市場経済化との関係にも着目せねばならないと考えた。

(2)近年の環境史研究によれば、一万年前の昔から人々は、自然環境にただ依存し、自然環境に生かされているような受身的な存在だったのではなく、周囲の自然環境を人為的に改変し、計画的に土地利用を行ってきたとされる(辻誠一郎他「自然環境との関係をどう構築するか」『東北学』2009年等)。近世期も同様であり、人々は自然環境に手を加え、その景観を変化させてきたのであった。ただしここで注意しなければならないのは、近世期、特に18世紀中頃以降になると、市場経済化が日本社会において急速に進み、村落社会においてもその影響を受けざるを得なくなっていくことである。当然その影響により、人々の自然環境への働きかけも変化し、また土地利用の在り方も変化したであろう。近年の日本経済史研究においては、徳川時代をアーリーモダン(初期近代)社会としてとらえ、その時代からすでに経済社会が成立していたと主張する潮流が強くなっている。そしてその時代の様々な経済活動や存在する諸関係・諸組織を、経済理論の枠組みから再解釈しようとする試みがなされている(例えば友部謙一『前工業化期日本の農家経済』2007年等)。しかし現代社会において議論が喧しい、市場経済の発展と環境という問題を、近世期という時代の中で真正面から取り上げた経済史研究は、それほど多くなかった。かえって経済史研究以外の分野から、現代社会に警鐘を鳴らすことを目的とし、十分な実証も無いまま、近世社会を循環型社会、サステイナブルな社会とみなす研究が多かった。それゆえ本研究を行う意義があると判断した。

## 2. 研究の目的

本研究は、自然環境、市場経済化、近世的土地所有制度、村落社会構造(家連合等)という、四条件の相互連関の表象としての土地利用の在り方を明らかにすることによって、環境史研究と経済史研究を実証的に繋ごうとする試みであった。調査対象村落として、蚕業地帯であり、蚕種商人の村として市場経済化が進んでいた信州上田上塩尻村、信濃川下流域の米作地帯にあり、かつ割地を行っていた越後西蒲原郡中郷屋村、海岸沿いの漁村である同角田浜村、角田山を擁し、山林経済を発達させ、かつ割地も行っていた同福井村を設定した。それらの村々は、自然環境も主要な生業も、また市場経済化の在り様も異なる村々であった。

このような調査対象村落について、その立地する自然環境に合わせて、村々がどのような土地利用を生み出していたのか。その際、市場経済化の度合い、様相の違いによって、それがどのように異なっていたのか。そしてそのような土地利用を行うため、各村々ではどのような独自の諸制度、諸組織・諸関係を生み出していたのか。あるいは逆にそれらが土地利用に如何なる影響を及ぼしていたのか。以上を明らかにすることを通して、近世村落社会における土地利用の在り方について、その地域的独自性を明らかにすることを、第一の目的としていた。

さらに一定の自然環境の中で市場経済化を迎えようとする際、近世村落社会が如何に対応し、土地利用に表現していたのか。つまり近世村落社会における、人々と自然環境との関わり合いの特質についても確認することも、第二の目的であった。

## 3. 研究の方法

本研究でとった研究方法は、オーソドックスな歴史学的史料調査と資料分析を中心とする実証作業がベースであった。それぞれの村について、資料所蔵地に出向き、資料調査・デジタル写真撮影と、それをを用いたデータベース作成作業並びに解読、考察作業を行った。

特に越後国西蒲原郡角田浜村については、庄屋文書所蔵者のご厚意で、その全資料を京都産業大学にお預かりすることができた。そして現在も同大学において集中的に資料撮影、検討・分析が進められている。

さらに上塩尻村では、当初想定していなかった隣村秋和村や下塩尻村の資料にもアクセスすることができ、村を超えた土地利用の在り方を研究する資料を得られたことは、本研究課題にとって、幸運なことであった。

加えて、研究分担者に地理研究者を加えたことにより、古地図や地形・地質調査、さらにはGISの利用等、自然地理学的手法をも大いに駆使することができた。その他、エクスカージョンによる自然環境の特徴やその変質に関する実地検分も行った。その結果、自

然環境に関する本研究組織内における理解が深まり、共通認識を持つことができ、それぞれの担当分野を考察するにあたって、その情報を加味することが可能となった。

#### 4. 研究成果

本研究によって、これまでのところ、以下のような成果を確認することができた。

(1) まず上塩尻村の事例から、従来のイメージとは異なり、長期間同一の土地を所有し、耕作し続けている事例は極めて少ないことが明らかとなった。特に特定の耕地は、長期間にわたり同一の家により耕作し続けられるという、農村社会に抱かれていた漠然としたイメージは修正する必要があると考えられる。村々が置かれた環境、各家々の経済状況、継承等社会状況、各家々の家業戦略に左右され、それぞれの家々の所有地は変遷し、耕作地も変化していったのであった。ただしやはり土地は、経済的、政治的、社会的に家を成り立たせるための財であった。農業を成り立たせるための耕地であったためである。しかしながら、それは特定の耕地でなくてもよかったのである。しかも家業としての農業の地位が下がれば、土地所有は、経済的側面よりも、政治的・社会的側面が高まる。言い換えれば、生産財としての側面より資産としての側面が高まるといえる。家産としての土地は、このような状況の中で生じてきたのではないかと推測しうる。まず以上のことが明らかとなった。

(2) 次に上塩尻村の土地利用状況を明らかにした。そこからは、活発に水田二毛作が行われていた様子がうかがえた。しかもこの村の農事歴を見ると、近隣の村々に比べて田植えの時期が遅かった。これは、麦刈取りと田植え間の時間的余裕を確保し、この時期の過密労働を緩和するという意味において、二毛作を行う上で有利な状況を生み出していたといえる。加えて二毛作にとどまらず、田畑輪換まで行われていた。何年かごとに田が、一年を通して畑として利用されていたのである。上塩尻村において、田畑輪換という非常に高度な耕地利用が行われていたことを見出した。またこの地域では、米生産のみならず、麦生産も重要視していたことがうかがえた。同時に多様な畑作物が栽培されていた。しかも小豆や蕎麦等の畑作物を作る際、桑畑が利用されていることは興味深い事実発見であった。

(3) 同時に、水田二毛作が行われていた耕地が、頻繁に自作地となったり小作地となったりしていたことも確認した。極端な場合、稲作と裏作とが異なる耕作者によって行われていた事例すら見出されたのである。このような短期間での耕作者の変遷は、土地所有者の経済活動状況に合わせ、臨機応変な土地利用が行われていたことをうかがわせるし、またそれを可能にする耕作担当者たちが、土地所有者の周りに存在していたことも意味す

るだろう。

ただこの事例の場合、土地所有者が同時に村最大の蚕種製造・販売者であったことも重要であると考えられる。水田の自作地化と小作地化の頻繁な転換は、水田二毛作の展開に伴う、特に春から夏にかけての時期の、極めて繁忙な状況から招来したものではないかと考えられるのである。つまり水田二毛作の展開と蚕種製造・販売の間に孕まれる緊張関係のためなのではないかと考えられるのである。

このように家業の展開の在り様によって、土地利用の在り方が規定されていたということが明らかとなった。

(4) 最後に中郷屋村の事例からの研究成果を上げる。

まず近世末期における中郷屋村の自然環境並びに土地利用の在り方を再現することができた。鎧淵縁に位置する同村は、地形的に信濃川水系からの2つのタイプの洪水を受けやすい地域に位置していた。1つは、中の口川上流部の決壊による氾濫型の洪水であり、もう一つは、中の口川中下流域からの堰水型の洪水である。このような洪水から身を守るために、同村では、村を取り囲む堤を構築していた。また土地利用にあっても、比較的洪水被害にあいにくい優良耕地を中心に生業を行い、また島畑や堀上田を構築して、耕地の生産性を高めようと努力していたことが明らかとなった。

そして次に、このような中郷屋村の土地利用状況、社会状況の中に、割地制を位置づけなおして検討することになった。

ところで水害常襲地帯に位置し、また入り組み支配地でもあった同村の置かれた立場から、特に水のマネジメントのために、村の範囲を超えた地域による連帯、協力関係が生じていた。同村は閉鎖的でもなければ、孤立した村落でもなかった。かえって社会的流動性の高い、西蒲原の他地域、他村との結びつきの強い村であったといえる。これは割地制を行う村の従来のイメージを塗り替える発見であったのではないかと思われる。

しかも同村をはじめのこの地域は、稲作のみで生活していたわけではなく、木綿稼ぎをはじめ、商品作物の生産・販売など、多様な生業により、その生活は支えられていた。この地域は、上塩尻村のように市場経済化が急速に進展していたわけではなかったが、一定の市場経済化は生じ、豊かではなかったかもしれないが、様々な生業を通じて安定した生活を送っていた。

そんな中で同村が割地を行っていたのは、村請制の下で、米納年貢を皆で納めなければならなかったからではないかと推察し得た。つまり村の中で年貢負担者を確認し、彼らにその責任を全うさせるための制度が、割地制ではなかったか、という理解を得ることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

高橋基泰「旧上田藩上塩尻村同族・分家誌」  
査読無 愛媛大学経済学研究叢書 18 巻  
1-211 頁 2014 年

山内太「近世期における田地所有者と耕作  
者の変遷史-信州小県郡上塩尻村の事例より-」  
東北学院大学経済学論集 177 号 査読  
無 403-18 頁 2011 年

長谷部弘 「「家」を比較研究するための  
覚え書き」東北学院大学経済学論集 177 号  
査読無 313-22 頁 2011 年  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2011/pdf/bk2011no09\\_16.pdf](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2011/pdf/bk2011no09_16.pdf)

佐藤康行 「縮小する地方社会における地  
域再生-持続可能な生計アプローチから見た  
佐渡」社会学年報 40 号 査読有 11 21  
頁 2011 年

岩間剛城 「信州上田藩上塩尻村永続講の  
一考察-奥印帳を手がかりとして-」東北学院  
大学経済学論 177 号 査読無 69-81 頁、2011  
年

〔学会発表〕(計 7 件)

山内太 「越後国西蒲原郡中郷屋村にお  
ける割地について」社会経済史学会 2014  
年 5 月 25 日 同志社大学

長谷部弘 「近世越後平野における治水  
と防水の支配・管理構造 水害常襲地帯にお  
ける共生システムの事例分析」社会経済史  
学会 2014 年 5 月 25 日 同志社大学

村山良之 「越後平野の自然環境と土地利  
用 西蒲原低地を中心に」社会経済史学  
会 2014 年 5 月 25 日 同志社大学

山内太 「Nature control and land use  
in flood areas: a case study of Naka-go-ya,  
Nishi-kanbara, Niigata, Japan」RURAL  
HISTORY 2013 2013 年 8 月 21 日 スイス・ベ  
ルン大学

長谷部弘 「Governance System of Flood  
Control in Tokugawa Japan: as the case  
study on the coexisting system of human  
being and nature in Echigo Plain」RURAL  
HISTORY 2013 2013 年 8 月 21 日 スイス・ベ  
ルン大学

村山良之 「Geographical Setting of  
Nakagoya Village and Its Vicinity」RURAL  
HISTORY 2013 2013 年 8 月 21 日 スイス・ベ  
ルン大学

高橋基泰 「Organizations in the English  
Fen-edge Area: for a Study of Historical  
Parallel and Contrast with the Warichi  
(Land Distribution)System in Echigo,  
Japan」RURAL HISTORY 2013 2013 年 8 月 21  
日 スイス・ベルン大学

〔図書〕(計 3 件)

佐藤康行 「平成の大合併と農山村の変

貌」日本村落研究学会年報『検証・平成の大  
合併と農山村』農山漁村文化協会 査読有  
11-38 頁 2012 年

長谷部弘 「共同性の歴史的意味」近世史  
サマーフォーラム 2010 実行委員会編『村落  
研究と歴史学 問題意識の共有と再発見』  
近世史サマーフォーラム 2010 年実行委員会  
査読無 1-8 頁 2011 年

長谷部弘 「町内会と防災活動 防災コミ  
ュニティの歴史的前提」吉原直樹他編著『防  
災コミュニティの基層』御茶の水書房 査読  
無 11-37 頁、2011 年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山内太 (YAMAUCHI, Futoshi)  
京都産業大学・経済学部・教授  
研究者番号: 70271856

### (2) 研究分担者

長谷部弘 (HASEBE, Hiroshi)  
東北大学・大学院経済学研究科・教授  
研究者番号: 50164835

高橋基泰 (TAKAHASHI, Motoyasu)  
愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号: 20261480

佐藤康行 (SATO, Yasuyuki)

新潟大学・人文学部・教授

研究者番号: 40170790

村山良之 (MURAYAMA, Yoshiyuki)

山形大学・大学院教育実践科・教授

研究者番号: 10210072

### (3) 連携研究者

岩間剛城 (IWAMA, Koki)

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号: 30534854